

靈寶經の研究―陸修靜と靈寶經の關係を中心に―

王皓月

中國の歴史上實在していた儒・佛・道三教の一つとしての「道教」とは三洞四輔部の經典に基づく「教」であるが、その中で特に注目されるのが三洞部の洞玄部靈寶經である。三洞説・三寶説など数多く道教の教理は靈寶經が唱えたものである。靈寶經の研究は道教研究においては、極めて重要な位置を占めており、また多くの研究成果が蓄積されてきた。

靈寶經研究の通説では、靈寶經の作者と成立時期を推測するには、梁・陶弘景の『真誥』卷十九の「葛巢甫造構靈寶、風教大行。」(十一b)という記載をもっとも重視しているが、しかし陶弘景の『真誥』卷二十には「陸(修靜)既敷述真文赤書・人鳥五符等」(二一b)という記載もあり、これによれば、陸修靜が『真文赤書』・『人鳥五符』などの經典を敷述していたことがわかる。

『真文赤書』・『人鳥五符』とは陸修靜の「靈寶經目」に記されている靈寶經であり、「敷述」とは敷演・撰述の意味であるので、『真誥』卷二十では、陸修靜は既存の經典に基づいて新しい經典である『真文赤書』・『人鳥五符』などを編纂することを意味することがわかる。また、北宋『崇文總目』などの歴史資料では、陸修靜が「昇玄歩虚章」を作ったと記されているので、「昇玄歩虚章」を載せる『洞玄靈寶玉京山歩虚經』も陸修靜が編纂した靈寶經であろうか。そこで、小稿では『真文赤書』・『人鳥五符』・『玉京山歩虚經』という三つの經典を中心に、陸修靜と靈寶經の關係を考察することにする。

次に、小稿の構成を述べておく。小稿は『真文赤書』の研究・『人鳥五符』の研究・『玉京山歩虚經』の研究という三篇からなり、各篇はそれぞれ三章(補論を含む)ある。

第一篇第一章では、『元始五老赤書玉篇真文天書經』の成書を中心に陸修靜と靈寶經の關係を考察する。まず、三卷本の道藏本『元始五老赤書玉篇真文天書經』は「靈寶經目」で二卷本とされる南朝本と同じものであることを検証する。そして教理と歴史の二つの角度から『元始五老赤書玉篇真文天書經』と「靈寶五篇真文」との關係を明らかにし、『元始五老赤書玉篇真文天書經』のなかの陸修靜以前に存在していた部分と陸修靜が新たに作った部分とを仕分けする。陸修靜の作と見られる部分の思想、特に三天と六天の觀念・六月齋と十日齋の觀念・元始天尊の神格の成立を考察し、それが劉宋天師道の思想と經典に由來するものであることを指摘する。陸修靜が葛巢甫の作った『靈寶赤書五篇真文(假)』をアレンジして『元始五老赤書玉篇真文天書經』を敷述したことが明らかになれば、陸修靜が靈寶經の編纂に關與したと推測できる。また、泰始七年の「靈寶經目」が編纂された時に「已出」とされる元始系靈寶經の編纂は元嘉十四年(四三七)の「靈寶經目」以前と以後の二段階に行われたが、二段階を経て成立した靈寶經はそれぞれの經典であるのかを經典の内容から推測する。そして、陸修靜の「靈寶經目」の三十六卷の元始舊經の經目はどのように編纂されたのかについて論じる。

第一篇第二章では、祕篆文「靈寶五篇真文」によって、その釋文を校正する。これまでは、祕篆文の「靈寶五篇真文」はあまり利用されず、「靈寶五篇真文」の内容を知るには、『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』などに載せる釋文を用いるしかなかった。

しかし、各本の「靈寶五篇眞文」の釋文はそれぞれ異なり、特に「靈寶五篇眞文」の内容を解釋するために作られた『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』には、釋文の内容は他の版本との違いが多く、字數さえ一致していない。釋文だけを見ても、どの版本の釋文が祕篆文「靈寶五篇眞文」の内容を正確に傳えているのかどうかを知ることができない。ところで、各本の「靈寶五篇眞文」の祕篆文と釋文を照らし合わせて校正すれば、もつとも正確な「靈寶五篇眞文」の釋文を得ることができると思われる。さらに、「靈寶五篇眞文」は本來七七十二字であるが、『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』に載せる六六八字の釋文は陸修靜によって改竄されたものであると思われる。

第一篇の補論では、天師道經典の『旨教經』の成書と内容について考察する。ここで『旨教經』を取り上げるのは、小稿の議論を進める上で重要な役割を演じる經典であるからである。例えば、『元始五老赤書玉篇眞文天書經』における六月齋・十日齋などの時節齋の内容は『旨教經』にも記されており、ほかにも同じ文章が兩經典に見えるので、『旨教經』の編纂の時期や『元始五老赤書玉篇眞文天書經』の編纂を考察するには極めて重要である。また、補論で言及されている指教齋法と靈寶齋法や塗炭齋法も、天師道と靈寶經の關係を研究するには重要な資料である。更に、『旨教經』と『太眞科』の關係に關する議論は、第二篇第二章の「人鳥山醮祭」の研究においては、發爐・復爐の語の成立を考察する時にも参照される。小稿では、まず『旨教經』は『三天内解經』以後、『太眞科』以前の四二三年頃に成立したと指摘する。そして、『旨教經』の内容を検討して、次の結論を得た。教理上指教齋法が天書の靈寶經に載せる靈寶齋法を模倣して作られたとされている。これは、歴史上靈寶齋法は指教齋法に由來することを隠すためである。また、『旨教經』では、指教齋法とともに塗炭謝儀を載せている。その塗炭謝儀は、五斗米道では、もともと上章の時に言う儀式であり、指教齋法の影響を受けて、後に齋法の構造を取り入れて、獨立する齋法である塗炭齋法となった。さらに、『旨教經』が唱えた六月齋と十日齋の觀念は『旨教經』に唱えられた後に、まず仙公系靈寶經の『太極真人敷靈寶齋戒威儀諸經要訣』に取り入れられ、その後『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱眞科』にも取り入れられて、最後に陸修靜がそれを詳しく解説して、『元始五老赤書玉篇眞文天書經』に加えた。『元始五老赤書玉篇眞文天書經』の十日齋の部分には、「太清玄元上三天無極大道」や「正一盟威太上無爲大道」という劉宋の天師道の「三天」の思想に由來する神格や觀念があることから、劉宋天師道の道士である陸修靜がその十日齋の部分の作者であるという推測が確認できる。

第二篇第一章では、『人鳥五符』の成書と影響を考察する。陸修靜の「靈寶經目」には『人鳥五符』と呼ばれる經典は記されていないが、『人鳥五符』の内容を究明して、それが劉宋の時に存在していた靈寶經であることを檢證する。『玄覽人鳥山經圖』や北宋・張君房『雲笈七籤』卷八十「元覽人鳥山形圖」には『人鳥五符』の一部の内容が収められているが、兩者の内容と収められている人鳥山の眞形圖は一致しない。『雲笈七籤』卷八十の「元覽人鳥山形圖」は陸修靜が敷述した『人鳥五符』における「人鳥」の部分に相當するものであり、その成立年代は元嘉七年（四三〇）から元嘉十二（四三五）年までの間と推測する。南宋以後、「人鳥」の部分が『人鳥五符』から獨立して『玄覽人鳥山經圖』になったが、本來の人鳥山の眞形圖が無くなって、後序と「太上人鳥山眞形圖」が本文の後に新たに加え付けられたと考えられる。また、「人鳥山經呪」が存在していたから、『人鳥五符』には、人鳥山の眞形圖に關する内容以外に、『太上洞眞經洞章符』に載せる生策五符の部分も存在していたと考えられる。また、『人鳥五符』が成立した後に、ほかの道教經典にどのような影響を與えた

のかについて考察する。『人鳥五符』には、元始天王と西王母が人鳥山の空中に天書を残したという話が記されているが、この話は後に發展し、人鳥山が三洞部經典を保管している山と考えられるようになった。まず、『上清太極隱注玉經寶訣』では三皇經を意味する「三洞經」が人鳥山に保管されていると説かれているが、この「三洞經」は後に洞眞・洞玄・洞神の三洞部經典の意味に解釋されて、三洞部經典が人鳥山で作られたという考えが形成された。そして、『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』をはじめとする上清經では、上清經が人鳥山に結び付けられ、さらに、『洞玄靈寶丹水飛術運度小劫妙經』・『太上洞玄靈寶八威召龍妙經』・『導引三光九變妙經』といった、梁末から唐初までの間に作られた三つの元始系靈寶經にも「人鳥山」の觀念が取り入れられている。

第二篇第二章では、『人鳥五符』に記されている人鳥山の眞形圖を供養する醮祭の儀式（「人鳥山醮祭」）を考察する。『太上靈寶五符序』卷下の「醮祝の儀」などの従来の醮祭の儀式と異なり、「人鳥山醮祭」には劉宋天師道の齋法の影響が見え、醮祭と齋法の二つの儀禮が融合した實例である。ここでいう融合とは、醮祭と齋法が連続的に行われるのではなく、醮祭に齋法の儀式が取り入れられたことを意味する。「人鳥山醮祭」の儀式には従來の方士が作った醮祭とは大きな違いがあるので、新型醮祭といえよう。「人鳥山醮祭」では齋法の儀式が取り入れられているが、それらの儀式の由來をさらに遡ってみると、主に二つのルートがあることがわかる。一つは、劉宋の天師道の儀式である。發爐と復爐の儀式や三捻香の儀式、臣妾と稱する稱名位の儀式などから、「人鳥山醮祭」が天師道の影響を受けたことは明らかである。もう一つは、南方の神仙道の仙術である。存思や鳴鼓とは、元々長生術として使われていたようである。劉宋の天師道は、従來の東晉の五斗米道の傳統に基づきながらも、南方の神仙道の儀式を積極的に吸収し、「人鳥山醮祭」のような新型醮祭を作ったのである。「人鳥山醮祭」が作られた時期には、指教齋法や「靈寶齋法」が既に一般的に行われているようになったので、齋法のために考案された儀式が「人鳥山醮祭」に取り入れられたのである。「人鳥山醮祭」は新型醮祭のモデルとなり、南齊の「醮海神法」はそれを模倣して作られたのである。

第二篇の補論では、道教の齋法儀禮における命魔の觀念の成立と展開を考察する。『無上黃籙大齋立成儀』卷三四や『元始無量度人上品妙經四注』卷四九には、歩虚の前に命魔の儀式があるが、用いられている「命魔呪」の出典を「靈寶五符人鳥經」と記している。ここから、『人鳥五符』では、人鳥山の眞形圖に關する内容以外に、「命魔呪」の内容もあつたことがわかる。『人鳥五符』に「命魔呪」が入っていた理由については、命魔の觀念の成立や歩虚の前に命魔の儀式を行う理由などを説明する時に考察する。まず、命魔靈幡の觀念を作った人は東晉の上清經の編纂者であるが、『無上祕要』の太眞中元齋品では、儀禮の道具である命魔靈幡がはじめて齋法儀禮に用いられているが、それは符として用いられていて、佛教のように旗としては用いられていなかった。太眞中元齋では上清經の『上清高上玉晨鳳臺曲素上經』に載せている五帝命魔靈幡が用いられるのは、太眞中元齋が上清齋法であるからである。また、命魔密呪については、劉宋初期の靈寶齋法である自然齋法が靈寶經の『人鳥五符』から「命魔呪」を取り入れて、歩虚の前に新たに命魔密呪の儀式を考案した。命魔密呪の儀式は、劉宋初期から北周の武帝末までの間に、自然齋法・百姓齋法・塗炭齋法という三つの齋法儀禮に行われていたようである。

第三篇第一章では、道藏本『洞玄靈寶玉京山歩虚經』の成立が注目される。北宋『崇文總目』などの資料では、陸修靜が「昇玄歩虚章」を編纂したとされるが、「昇玄歩

虚章」は「靈寶步虚辭」に相當し、道藏本『洞玄靈寶玉京山步虚經』に載せているので、『洞玄靈寶玉京山步虚經』は陸修靜が敷述した靈寶經の一つであるのかを検證したい。また、道藏本『洞玄靈寶玉京山步虚經』は「靈寶經目」に記されている『太上説太上玄都玉京山經』に相當すると思われるが、先行研究に指摘されるように、道藏本『洞玄靈寶玉京山步虚經』は南朝本『太上説太上玄都玉京山經』そのままではなく、唐代の頃に「太上智慧經讚」などの内容が加えられたと考えられる。本章においては、道藏本『洞玄靈寶玉京山步虚經』の成立の問題を検討し、さらに各道書の引文を照らし合わせて、道藏本『洞玄靈寶玉京山步虚經』の「太上智慧經讚」などの内容は本来劉宋の頃に成立した仙公系靈寶經からの引用であることを検証する。まず、北宋の『崇文總目』や南宋の『通志』によれば、陸修靜が「昇玄步虚章」の作者であると記されているが、その記載は道教の教理に背くものであり、さらに『太上説太上玄都玉京山經』の構造は陸修靜が敷述した『元始五老赤書玉篇眞文天書經』をはじめとする元始系靈寶經の構造とは異なるものであり、元始系靈寶經よりも先に作られたようであるので、陸修靜が「昇玄步虚章」を作った可能性はないように思われる。そして、『太上説太上玄都玉京山經』の經典名には步虚の二文字がなく、太上道君が玉京山を解説する内容を記すものであるが、そのなかに「昇玄步虚章」に相當する「靈寶步虚辭」が記載されているので、陸修靜は經典の内容によつて、元始舊經である「昇玄步虚章」と對應する經典は『太上説太上玄都玉京山經』であると決めたのである。「靈寶步虚辭」だけでは經典にはならないので、「昇玄步虚章」は最初から『太上説太上玄都玉京山經』に載せられていたのである。さらに、南朝本『太上説太上玄都玉京山經』には、「太上昇玄步虚章」という別名が使われていたが、唐の初頃にほかの靈寶經の經典名と統一し、さらに『昇玄經』との混同を避けるために、『洞玄靈寶玉京山步虚經』の經典名が成立し、従來の南朝本『太上説太上玄都玉京山經』と區別するために、仙公系靈寶經から「太上智慧經讚」・「五眞人頌」・「禮經三首呪」と靈寶經の傳授の系譜や、上清經から「太洞玄經玉京山訣」といった新しい内容が加えられた。また、存思法は明の頃に道藏本に入れられたと推測される。

第三篇第二章では、道教の齋法儀禮の儀式である靈寶步虚を考察する。靈寶步虚に使われている「靈寶步虚辭」は『洞玄靈寶玉京山步虚經』の中心的内容であり、靈寶步虚の成立と上清經の步罡や佛教の繞佛との關係を明らかにする。また、梁末や唐の初期に成立した靈寶經の『洞玄靈寶丹水飛術運度小劫妙經』では洞玄齋法を行う時に梵音で「靈寶步虚辭」を歌うよう規定するが、道教における梵音の成立を明らかにするとともに、それが實際にどのように行われていたのかを推測する。最後、道教音樂の研究における「靈寶步虚辭」の位置づけを検討する。まず、靈寶步虚の原型は天上界の儀式であるが、劉宋の初期に成立した『太極真人敷靈寶齋戒威儀諸經要訣』に記されている「靈寶齋法」をはじめとする齋法儀禮に取り入れられた。齋法儀禮では、靈寶步虚を行うための、叩齒・存思・命魔密呪・步虚という儀式の流れは劉宋の初期に成立した自然齋法から定着したが、それは東晉の上清經の步罡での叩齒・存思・密呪・步罡の儀式の流れを模倣して考案されたのである。特に、上清經の『太上飛行九晨玉經』では步罡を行う時に三篇の「徘徊游行九晨羽章」が歌われるが、「靈寶步虚辭」はその影響を受けて作られたと推測する。ただし、靈寶步虚と東晉の上清經の步罡とは違って、靈寶步虚の際には道士が星圖によって移動することがなく、その代わりに香爐或いは香燈をめぐって旋行する。この靈寶步虚での旋行は、佛教の繞佛の影響を受けたと思われる。佛教では右繞であるが、道教では「左主生、右主死」の觀念に基づいて、左繞に變えられたと考えられる。次に、梁末や唐の初期に成立した靈寶

經の『洞玄靈寶丹水飛術運度小劫妙經』では、梵音（梵天音）で「靈寶步虛辭」を唱えることを記しているが、道教における華夏音・梵音（梵天音）という二つの音韻の成立と使用に關する考察を通じて、その意味を明らかにしたい。道教側は老子が外國の梵音で説教したと説き、梵音（梵天音）も華夏音とともに道教經典を讀む時の正音とされたのである。『上清太極隱注玉經寶訣』では、人鳥山の上の衆聖が梵音（梵天音）で經典を朗讀すると説くように、梵音（梵天音）の使用はただ架空のようであり、道士の間で使われていたことを示す記載は見えない。このように見れば、大洞齋法に羅天玄音が配當され、靈寶齋法に梵音（梵天音）が配當され、洞神齋法に中夏音が配當されるという對應關係は、ただ『洞玄靈寶丹水飛術運度小劫妙經』の作者の想像であることがわかる。最後に、道教音樂の曲調・器樂・歌詞という三つの方面から、靈寶步虛と早期の道教音樂との關係を見てきた。「靈寶步虛辭」と對應する決まった曲調はないので、所謂「步虛調」とは一つの曲調ではなく、また、靈寶步虛という儀式で演奏する決まった器樂もなかったように思われる。つまり、道教音樂では、實は歌詞としての「靈寶步虛辭」が重要な役割を果たしていたのである。歌詞としての「靈寶步虛辭」が作られる前に、東晉の上清經の編纂者は既に大量の真人歌を作っていたが、『上清諸眞章頌』を見ればわかるように、「靈寶步虛辭」の影響が大きくなるにつれて、上清經の讚頌でも步虛の觀念が取り入れられたのである。

第三篇の補論では、いわゆる葛洪の「枕中書」の眞僞を論じる。これまでは、「枕中書」の眞僞についての論文が幾つかあるが、まだ定説がない。小稿の考察により、「枕中書」の内容は三國呉・徐整の『三五曆紀』に類似し、兩者の宇宙論が蓋天説であることが明らかとなった。特に、「枕中書」に見える「天形如巨蓋」という表現は、蓋天説の特徴的な表現である。また「枕中書」では、宇宙の混沌の状態を鷄子に喩えており、渾天説の天が地を包む様子を喩える鷄子とは異なる。さらに「枕中書」には、天地の距離は「三萬六千里」であると考えられているが、この數字は當時の天文學の諸説と異なるので、「枕中書」の作者はあまり天文知識を持っていない人であると推測される。元始天王や玉京山などの「枕中書」に記されている觀念が葛洪の考案したものでなければ、靈寶五符以外に、葛洪の時代の經典と東晉末や劉宋初期の靈寶經との思想的な繋がりは非常に少ないともいえよう。

最後に、次の三點が本論の考察によって得られた結論である。

第一に、陸修靜が「靈寶經目」に記されている靈寶經の編纂に關與したことである。

第二に、陸修靜は敷演という手法で靈寶經に編纂に關與したことである。

第三に、陸修靜が靈寶經を敷演した目的の一つとしては、天師道の教法や儀禮を靈寶經と融合させ、同時に靈寶經によって天師道の傳統の教法や儀禮に神聖性を與えることが擧げられることである。